

What's New

11月19日(土)CCS講演会を開催しました

見学会は20名、講演会は180名の方にお集まりいただきました。
ご参加いただきました皆さまに心より御礼申し上げます。

★見学会 ～午前開催～



CCSや苦小牧CCS大規模実証試験への理解を深めていただきました。

★CCS講演会 ～午後開催～



岩倉市長と副市長のとまチョップによるごあいさつ



第一部
気象予報士 菅井貴子さん



第二部
資源エネルギー庁 佐伯徳彦氏



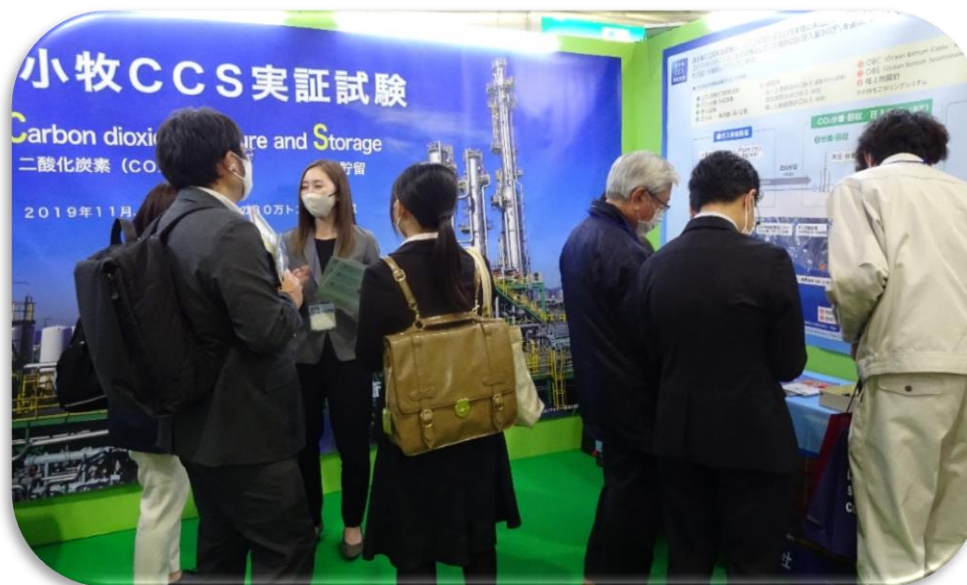
What's New

11月10日(木)、11日(金) 2022北海道ビジネスEXPOに出展しました

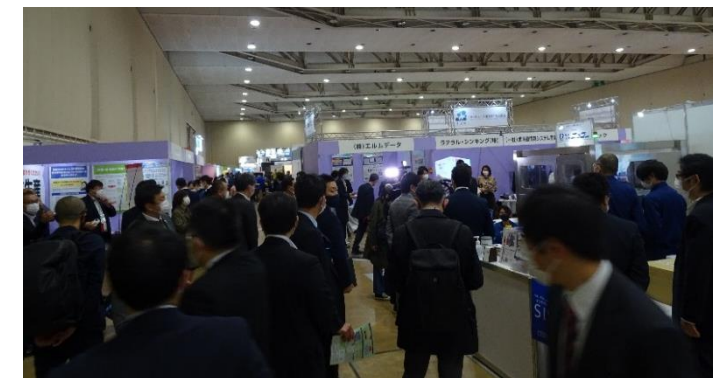
当社ブースへのご来場、誠にありがとうございました。



間口が広く、来場者が入りやすいブースです。



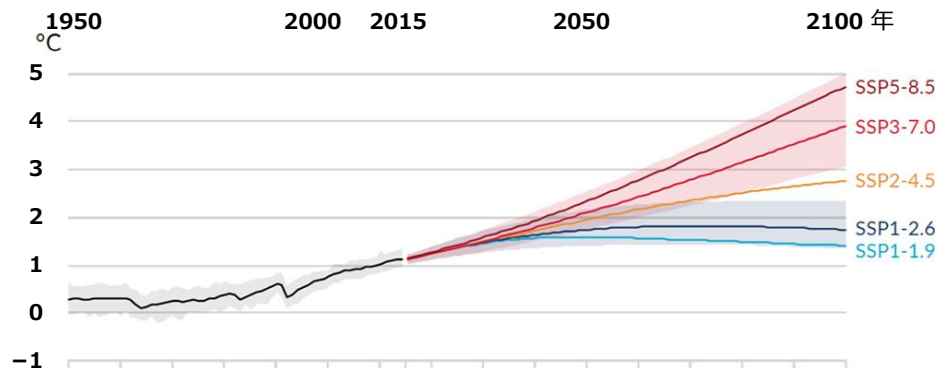
当社ブースへの来場者が絶え間なく訪れ、とても盛況でした。「CCS」、「苫小牧CCS大規模実証試験」を多くの方々にご説明することができました。



活気あふれる会場の様子

地球温暖化と将来の気候

● 1850～1900年を基準とした世界年平均気温の変化



SSP5-8.5	化石燃料依存型の発展の下、気候政策を導入しない
SSP3-7.0	地域対立的な発展の下、気候政策を導入しない
SSP2-4.5	中道的な発展の下、気候政策を導入 2.7°C上昇。パリ協定に基づく2030年までの各国のNDCによる排出量
SSP1-2.6	持続可能な発展の下、2°C未満に抑える。 21世紀後半に、CO ₂ 排出ゼロの見込み
SSP1-1.9	持続可能な発展の下、約1.5°C以下に抑える 21世紀半ばに、CO ₂ 排出ゼロの見込み

IPCC(気候変動に関する政府間パネル)は、第6次報告書の中で「人間の影響が大気、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」との結論を出しました。

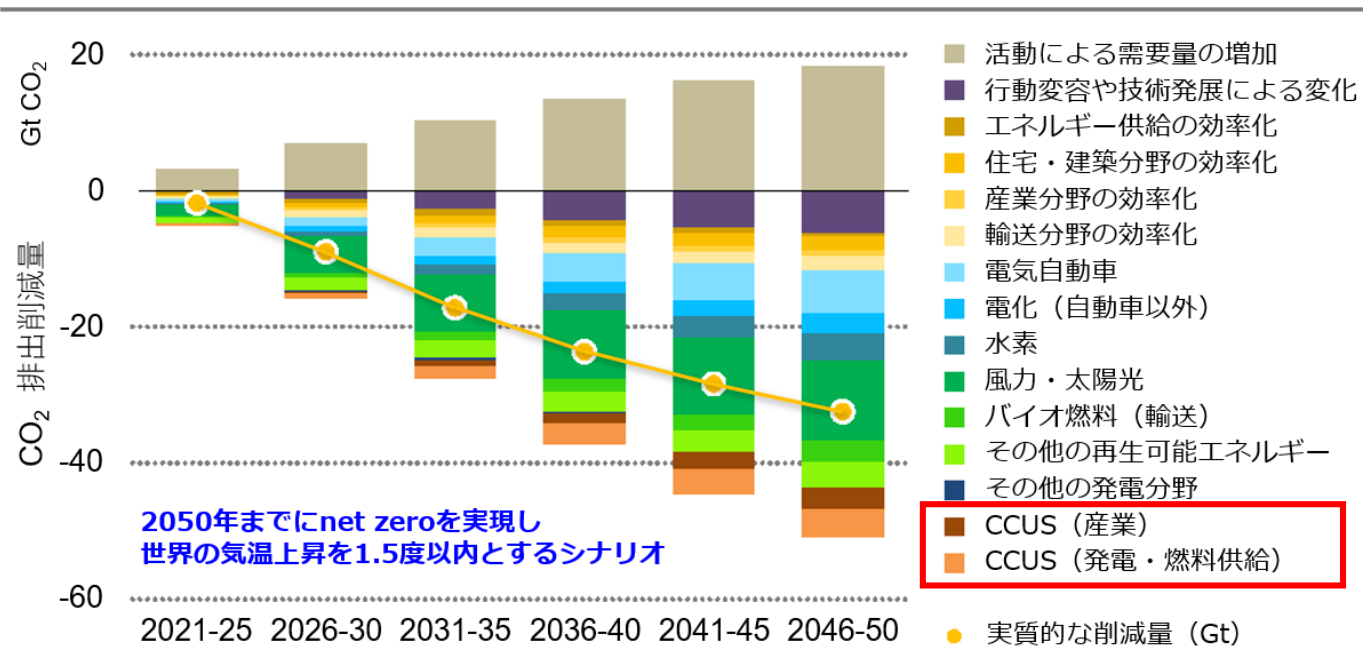
温暖化を1.5°Cで止めるには、今世紀半ばにCO₂排出量を実質ゼロにすることが必要と指摘されています。

出典：気象庁「IPCC AR6/WG1報告書(SPM)暫定訳(2021年9月1日版)」を基にJCCSが作成 https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ipcc/ar6/IPCC_AR6_WG1_SPM_JP_20220512.pdf

出典(上表)：気象庁「参考資料_別添3」を基にJCCSが作成 https://www.jma.go.jp/jma/press/2108/09a/ipcc_ar6_wg1_a3.pdf

CCUSのCO₂削減ポテンシャル

■ 2020年を基準としたCO₂削減量（年平均）の内訳

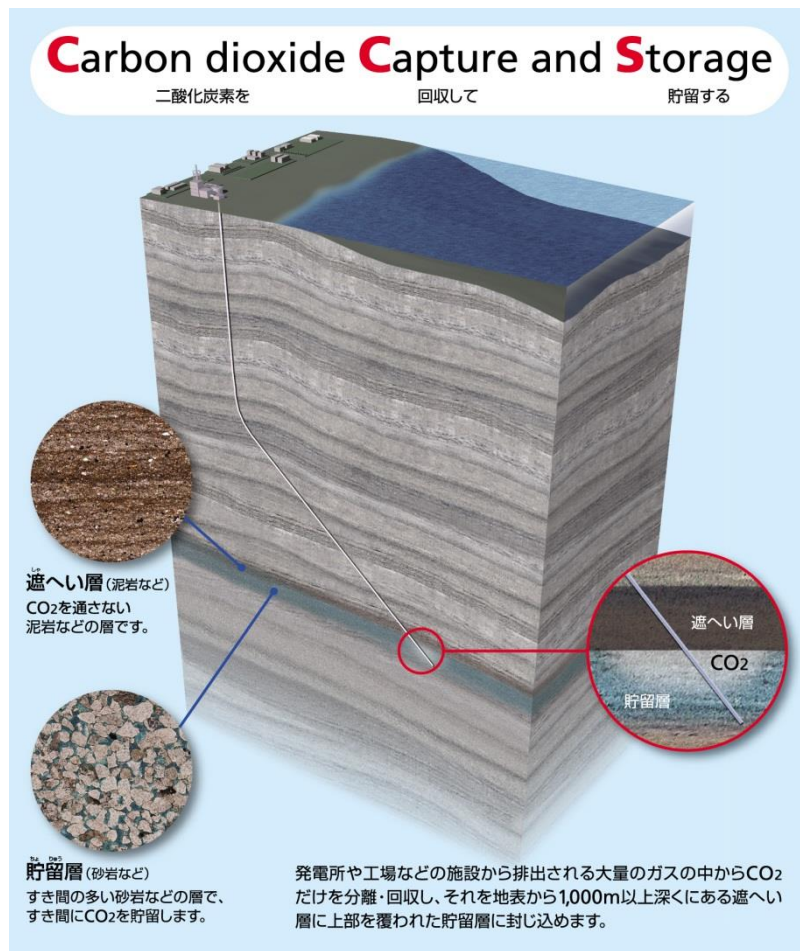


国際エネルギー機関(IEA)はCCUSによるCO₂削減量を、2030年までに全世界で年間16億トン(1.6Gt)、2050年にはその約5倍の年間76億トン(7.6Gt)にまで増やすことを見込んでいます。

出典：資源エネルギー庁ホームページ
(https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyoku/asiaccusnetwork.html?ui_medium=enecho_mailmag)

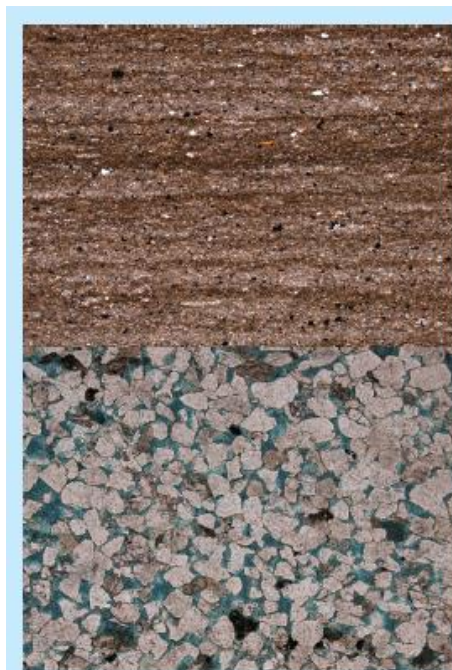
出典：IEA (2021) Net Zero by 2050: a Roadmap for the Global Energy Sector. IEAがすべての権利を保有、加工および日本語訳はJCCSによる。

CCSとは



CCSとは、工場や発電所から排出されるガスから二酸化炭素(CO₂)を分離・回収し、地中に貯留することによって、大気中へのCO₂放出を抑制する革新的な地球温暖化対策技術です。

二酸化炭素(CO₂)を貯留するには



■遮へい層の特徴

細かい粒の粘土などが固まった泥岩など

- ・水が浸透しにくい性質
- ・十分な遮へい能力
- ・広く厚く貯留層を覆う

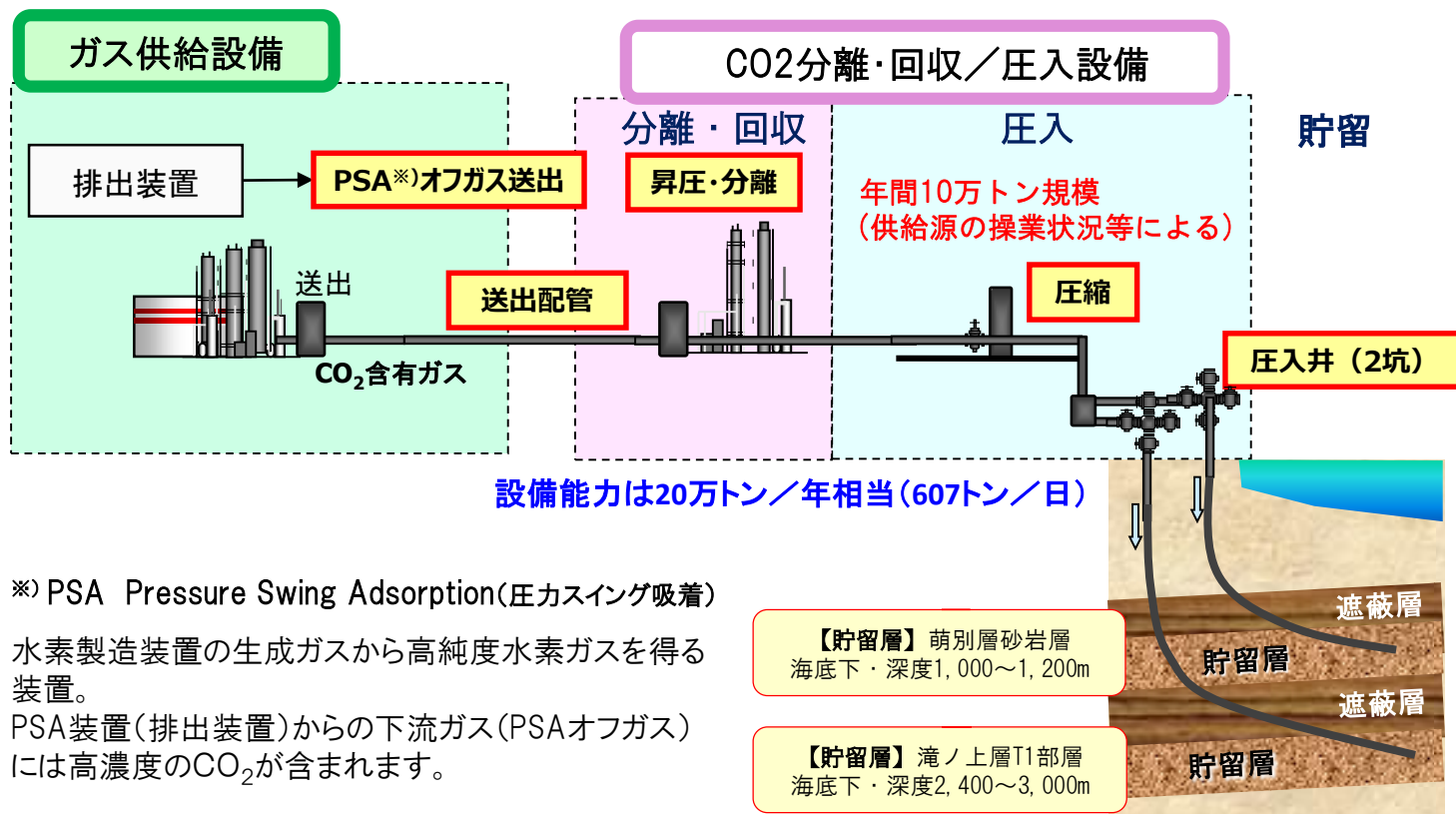
■貯留層の特徴

粒の粗い砂などが固まった砂岩や火山岩など

- ・CO₂を貯留するのに十分なすき間がある
- ・浸透性が高い

CO₂を海底下の地中に封じ込めるためには、貯留層とその上部に遮へい層が存在する地質構造が必要です。遮へい層は、貯留層に圧入したCO₂が貯留層から漏れないよう遮へいしています。

苫小牧実証試験：全体概要



製油所の水素製造装置から生成される二酸化炭素(CO₂)を含むガスから、CO₂を分離・回収し、圧入に必要な圧力まで昇圧(最大23MPa)して、年間10万トン規模のCO₂を苫小牧沖の2つの貯留層に圧入し貯留します。

※) PSA Pressure Swing Adsorption(圧カスイング吸着)

水素製造装置の生成ガスから高純度水素ガスを得る装置。

PSA装置(排出装置)からの下流ガス(PSAオフガス)には高濃度のCO₂が含まれます。

出典：経済産業省 苫小牧地点における実証試験計画より編集

実証試験スケジュール(2012年度～)

委託契約期間 2012～2023年度

■ 2012～2015年度、準備期間

設備の設計・建設、圧入井の掘削、実証運転の準備等を実施

■ 2016年4月～2019年11月、CO₂圧入(2019年11月22日、30万トン達成・停止)

■ 2016年度～モニタリング(*)、継続中

■ 2019年11月～設備の保全、機能改善等

■ 2021年度～CCSとCCUの連携運用の検討・準備等



(*) 圧入したCO₂の挙動(移動、広がり)を把握し、微小振動、自然地震を常時観測し、海洋環境調査を通じてCO₂の漏れがないか監視。

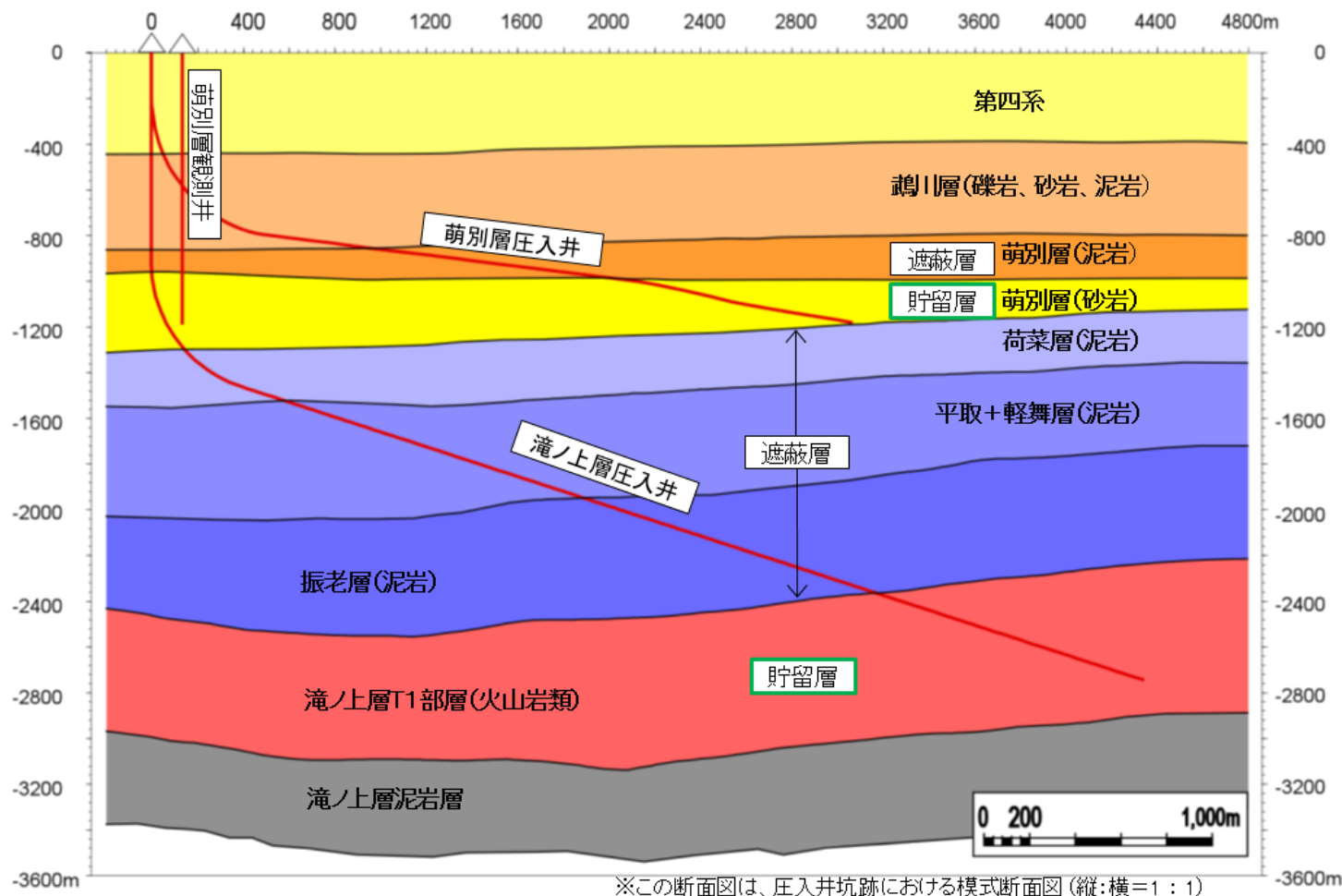
苫小牧実証試験：地上設備の位置関係



「ガス供給設備」は製油所の水素製造過程で生成されるPSAオフガス(CO₂含有ガス)を、延長1.4kmのパイプラインで「分離・回収・圧入設備」に送るための設備です。

「分離・回収・圧入設備」では、パイプラインで送られてきたCO₂含有ガスから純度99%以上のCO₂を分離・回収し、圧縮機により圧力を高めて、2坑の圧入井から海底下の貯留層へ圧入し貯留します。

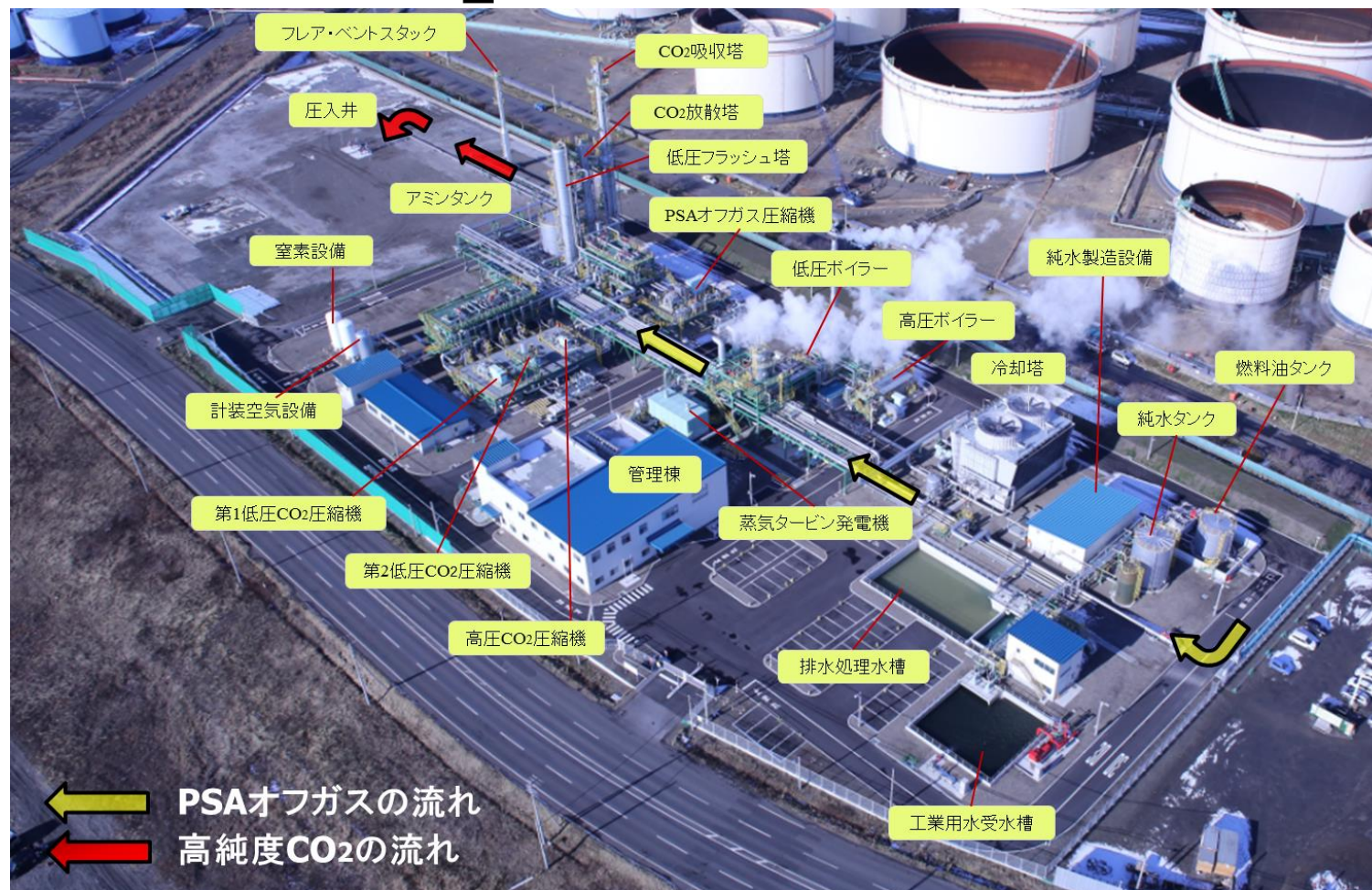
苫小牧実証試験：貯留層と圧入井



CO₂貯留地点の地質断面図です。貯留層である滝ノ上層T1部層および萌別層砂岩層に2坑の圧入井によりCO₂を圧入します。

滝ノ上層圧入井は、掘削長5,800m、最大傾斜72度の傾斜井です。萌別層圧入井は、掘削長3,650m、最大傾斜83度の傾斜井です。

苫小牧実証試験：CO₂分離・回収・圧入設備の空中写真



苫小牧実証試験：CO₂分離回収装置および圧縮装置



CO₂圧縮装置

分離・回収したCO₂を
圧入に必要な圧力
まで昇圧します。

CO₂分離・回収装置

PSAオフガス中のCO₂を
分離・回収します。

二酸化炭素(CO₂) 圧入量実績

2019年11月22日、圧入を終了しました

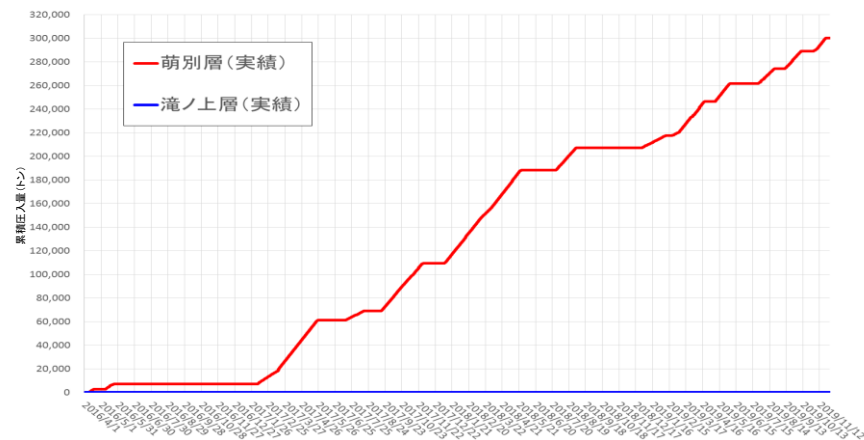
累積CO₂圧入量
(2016年4月6日～2019年11月22日)

300,110.3 トン

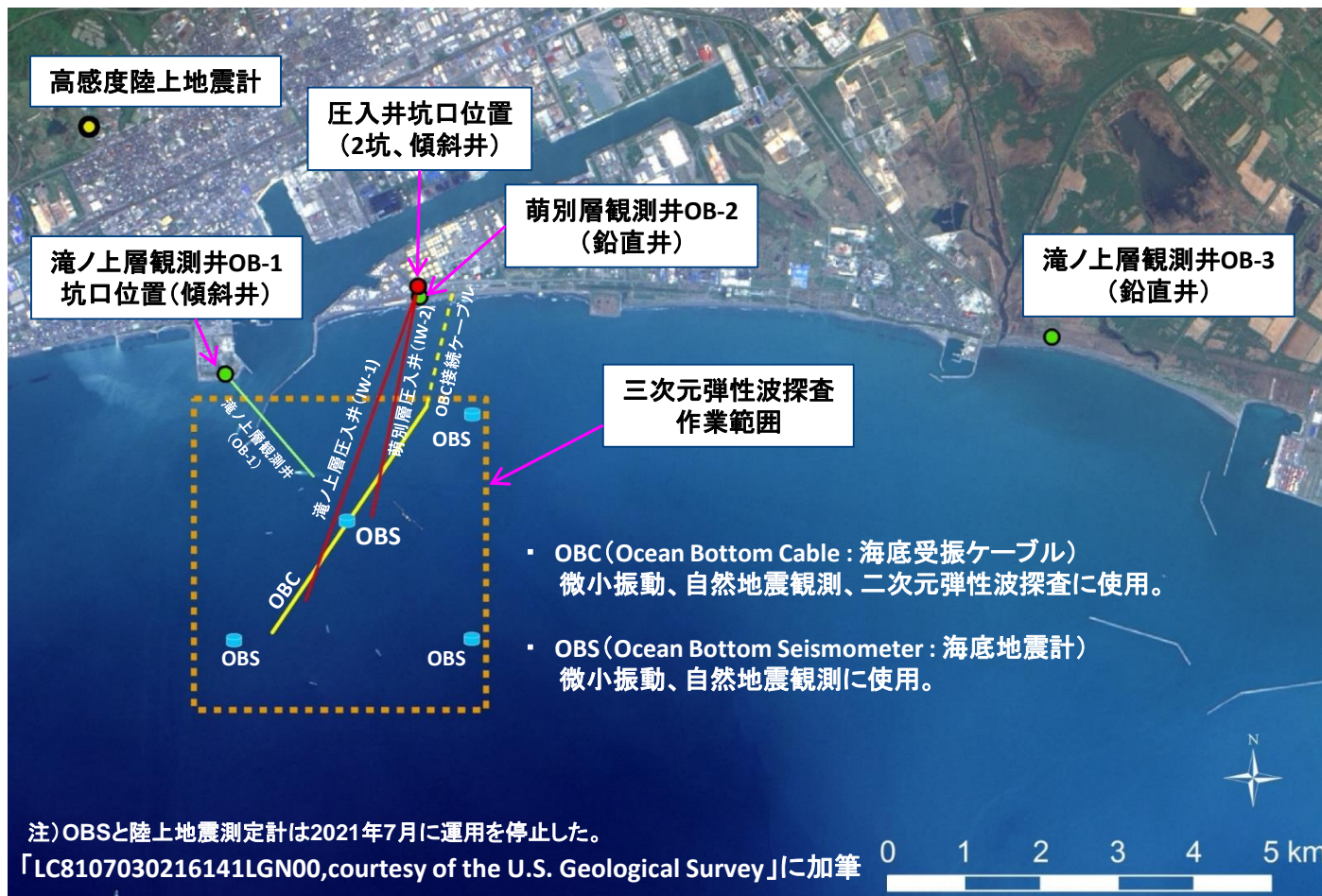
2019年11月の圧入実績

	月間圧入実績 (2019年11月)	累積圧入実績 (2019年11月22日)
萌別層	10,793.5トン	300,012.2トン
滝ノ上層	0.0トン	98.2トン

累積圧入量の推移



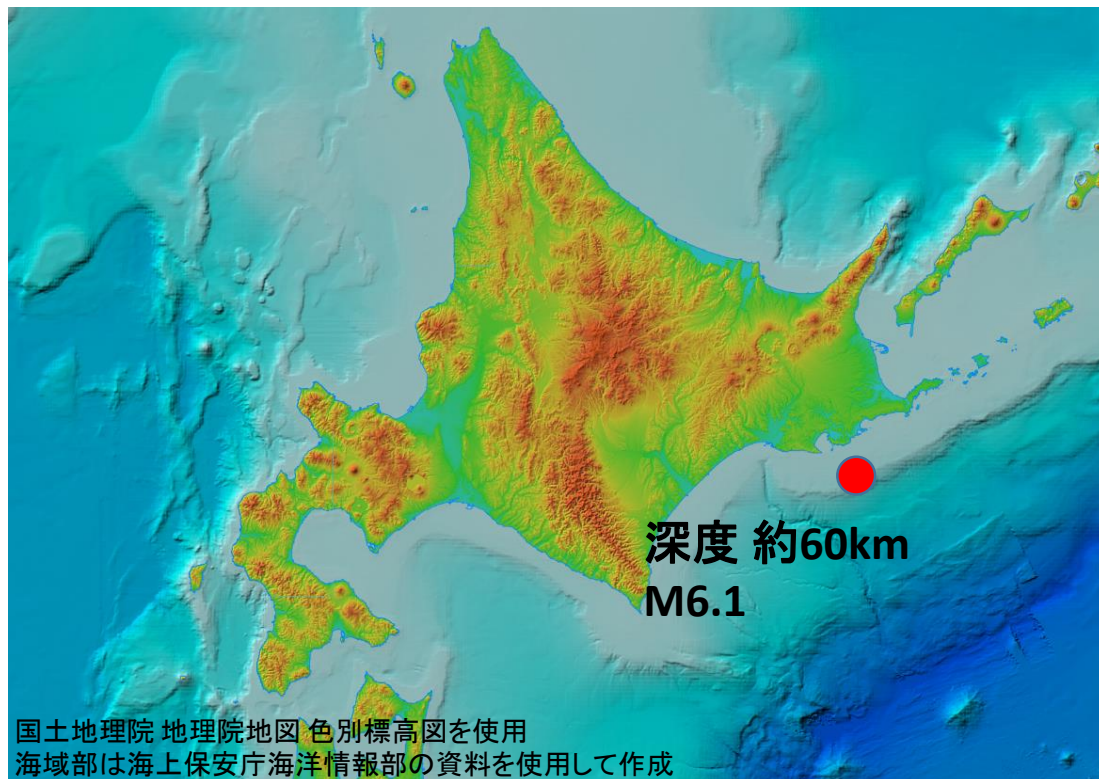
苫小牧実証試験 モニタリングネットワーク



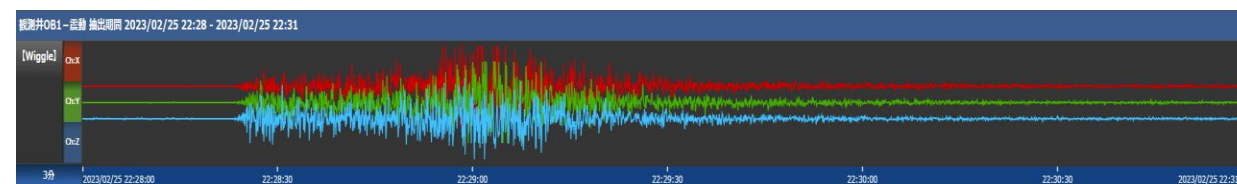
■ CO₂圧入地点近傍および周辺に観測ネットワークを整備し、CO₂圧入前(1年間)、CO₂圧入中(3年間)および圧入終了後の6年間以上に亘って継続してモニタリングを行います。

- CO₂圧入地点周辺に掘削した観測井(3坑井)およびCO₂圧入井(2坑井)の坑内で地層の圧力、温度を観測しています。
- 観測坑井内および海底に地震計を設置し、地震(体に感じることのない微小な振動を含む)を観測しています。
- 観測データは苫小牧実証試験センターで集中管理され、異常の有無を常時モニタリングしています。

苫小牧市で観測された直近の有感地震



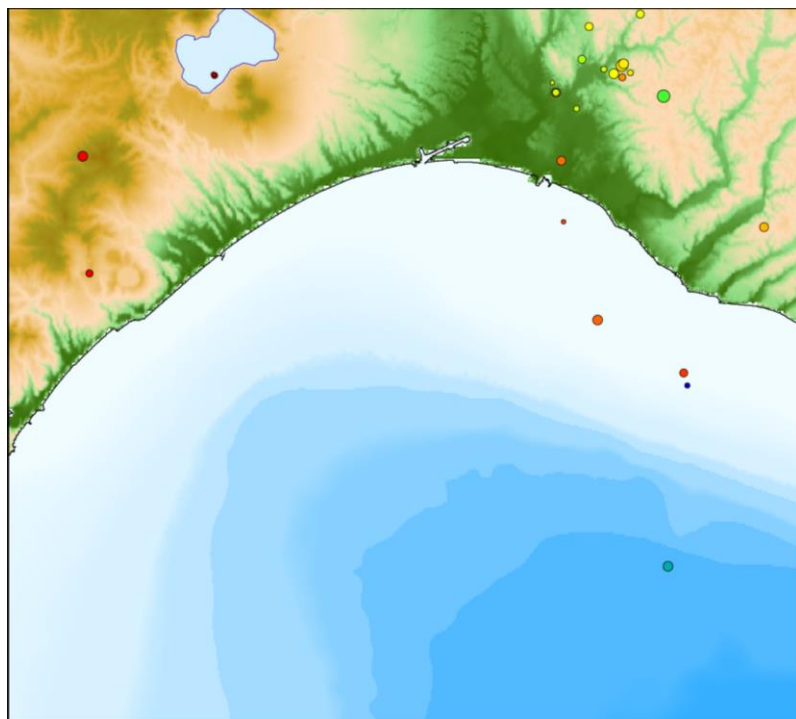
本実証試験における観測井内地震計の観測波形



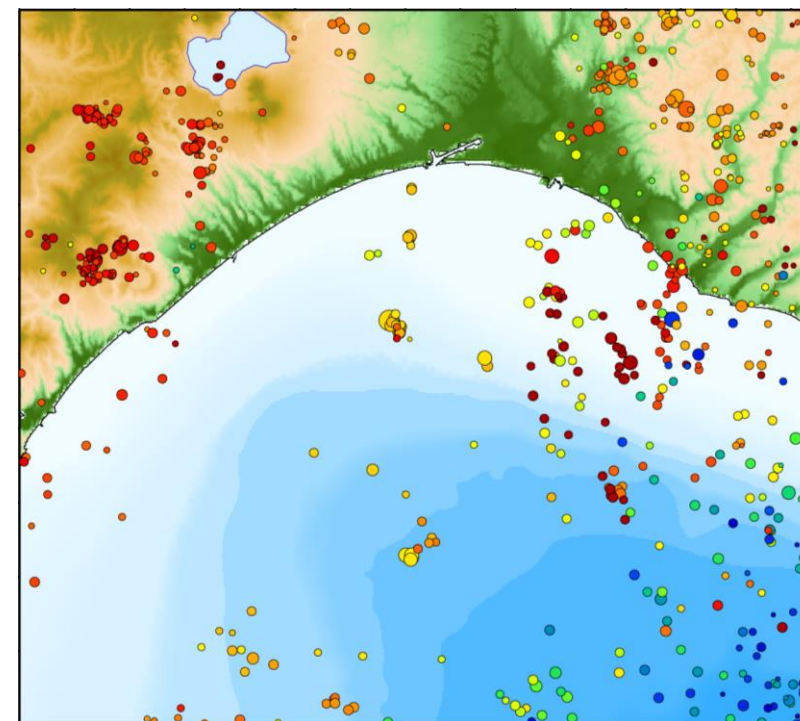
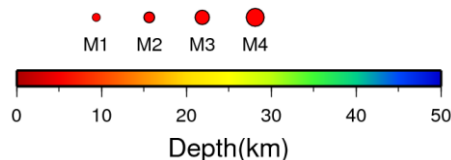
震源情報 気象庁発表

発生時刻	2023年2月25日 22:27
震源位置	緯度 42° 48' N 経度 145° 6' E 深度 約60km
地震の規模	マグニチュード 6.1
苫小牧市での震度	1

苫小牧市周辺の自然地震発生状況



2023年1月の自然地震震源分布



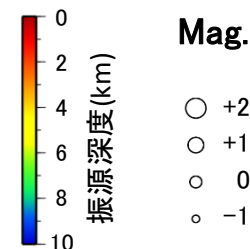
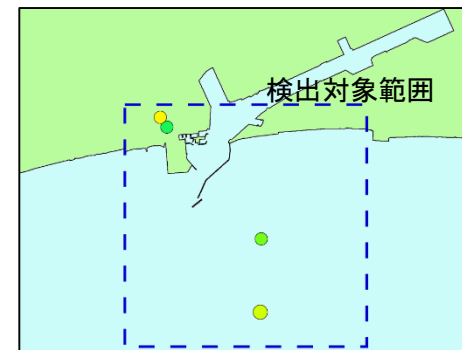
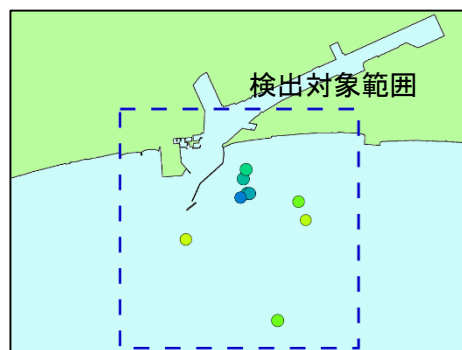
2001年～2010年に発生した自然地震震源分布

図中震源位置は気象庁一元化震源リストによる。震源深度50km以浅の地震を表示。

地形図は、国土地理院 数値地図250mメッシュ(標高)および海上保安庁「日本海洋データセンター」500mメッシュ水深データより作成

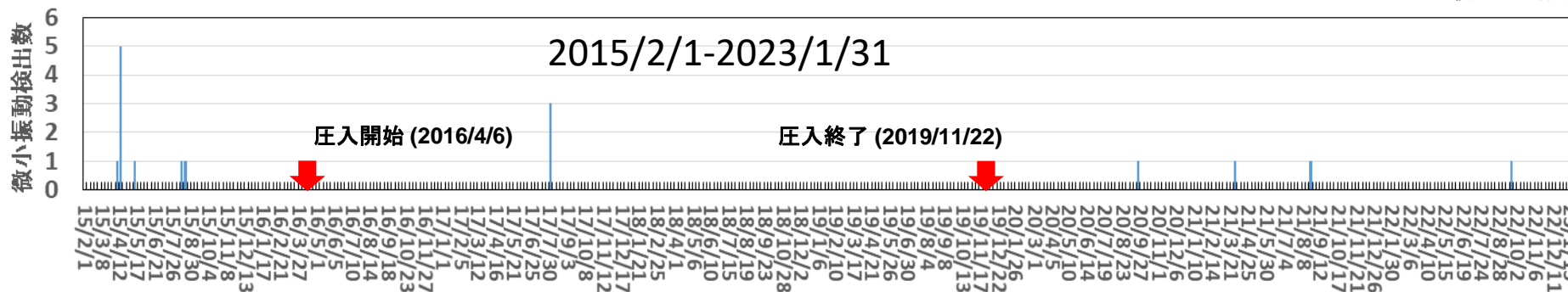
圧入地点周辺で検出された微小振動

圧入開始前(2015/2/1-2016/3/31) 圧入期間中(2016/4/6-2019/11/22) 圧入終了後(2019/11/23-2023/1/31)



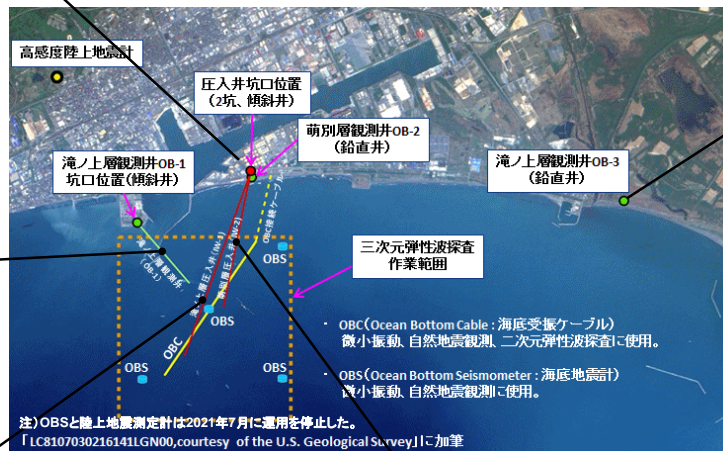
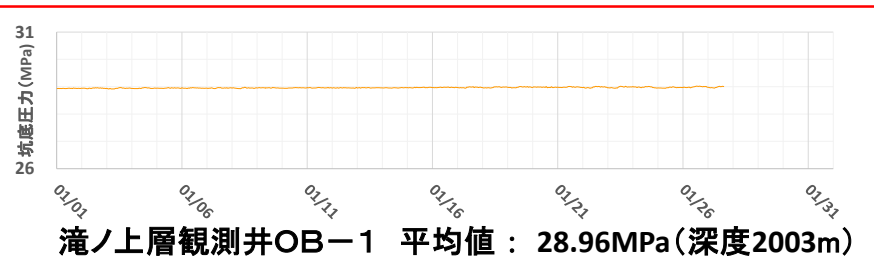
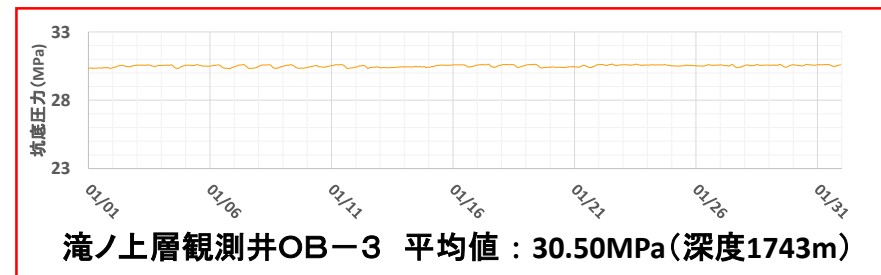
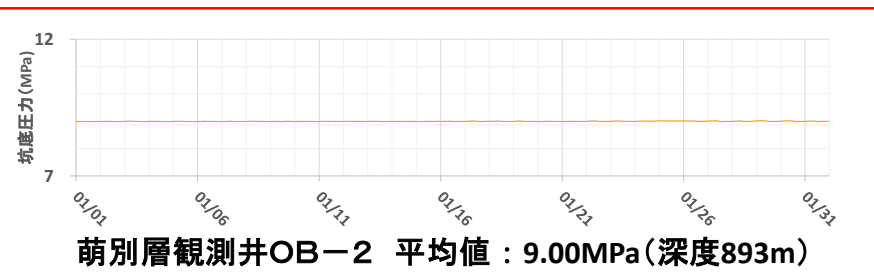
左の地図は、国土地理院
基盤地図情報海岸線データを使用
して作成した

微小振動
検出数推移
(各週)

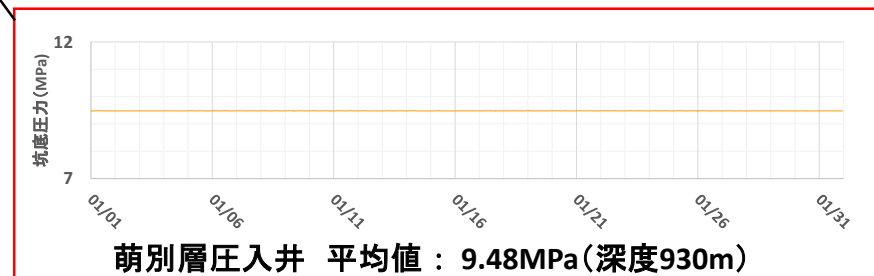
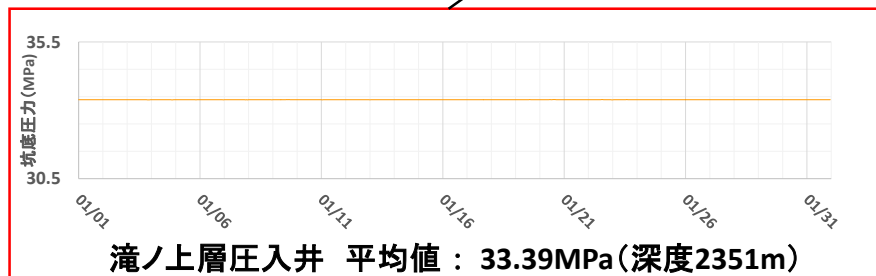


- 地震には、体に感じる有感地震と、実際に振動していても体に感じない無感地震があります。
- 本実証試験では、後者の無感地震のうち、特に規模の小さいもの(マグニチュード1未満)を微小振動と定義します。
- 本実証試験では、観測点配置の制約、地震計の検出能力の制約等から、圧入地点周辺の深度50km以浅を振源とするマグニチュード-0.5以上の微小振動をモニタリング対象としています。

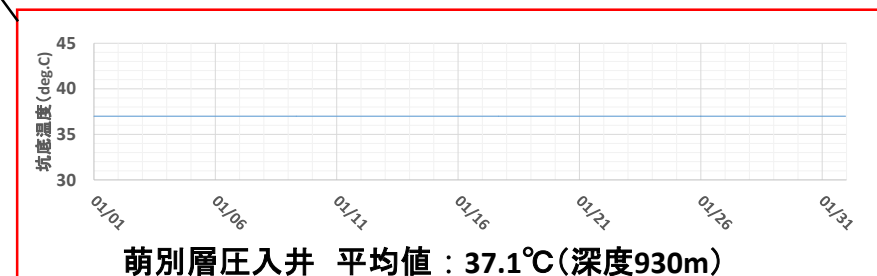
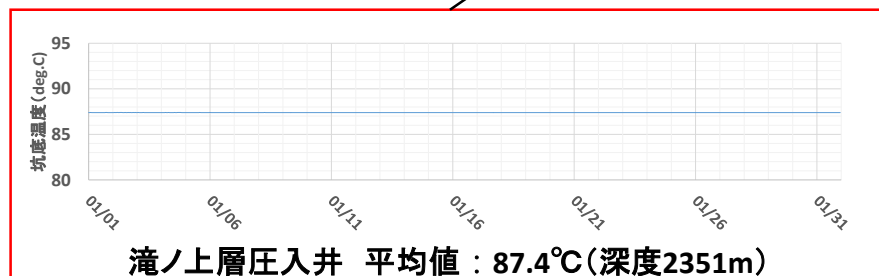
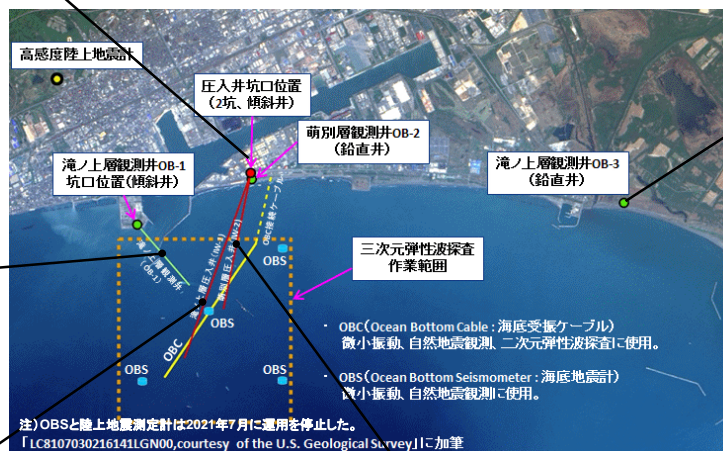
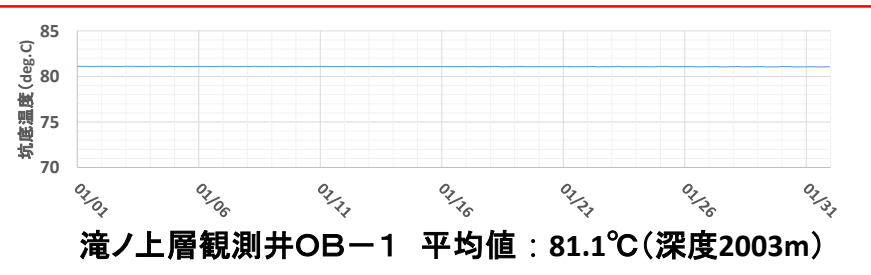
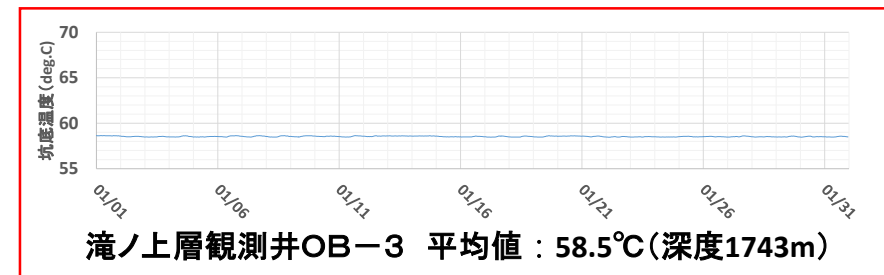
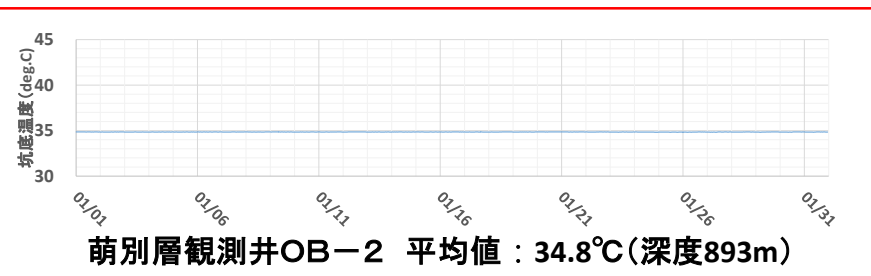
坑井内圧力観測(2023年1月)



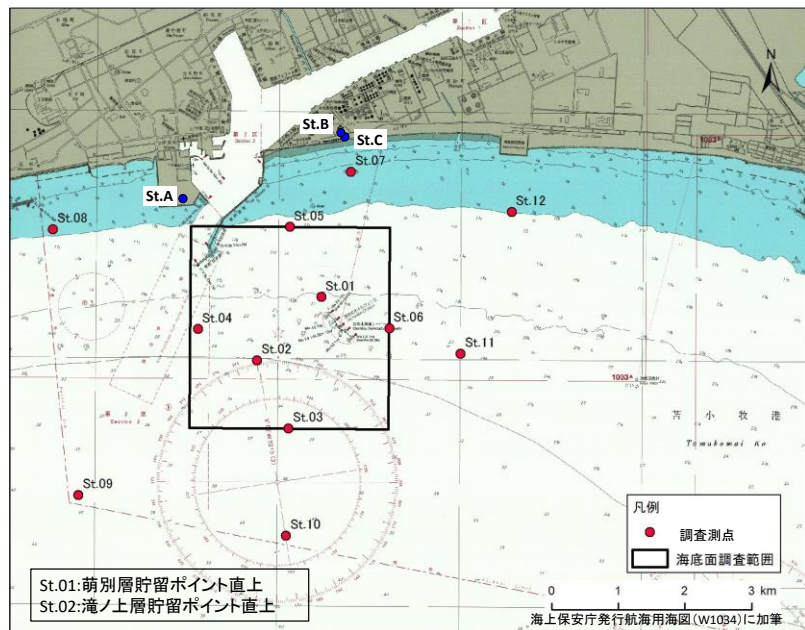
点検中(1/27-1/31)



坑井内温度観測(2023年1月)



圧入地点周辺の二酸化炭素(CO₂)濃度(季節観測)



地上の3地点(St.A～C)と海上の12地点(St.01～12)でCO₂濃度の季節観測を実施しています。

CO₂濃度は、地上観測点では体積比(単位: volppm)、海域観測点では分圧(単位: μ atm)で表示しています。海域観測点の値は海底面の上方2mの位置での測定値に基づくものです。

